令和７年度第３回推進協　グループワーク開催報告

1. 日　時

令和８年３月４日（水）　１０：２０～１２：００（１００分）

２．内　容

講　師　千葉大学　関谷　昇　教授

テーマ　～支援者の視点から　地域のこれからの取組みを「見える化」していく～

３．参加者

推進協委員　×　２５名

２層生活支援コーディネーター　×　５名

〇グループ分け×５グループ（各グループ６名前後）

（あんしんケアセンター圏域　①大宮台、②桜木、③都賀、④千城台、⑤みつわ台）

４．グループワークの進行

（１）グループワーク・オープニング

- 講師紹介　目的・概要説明（駒野委員長より）
- 関谷教授からのグループワーク進行の説明

◇関谷教授からの説明

昨年度の講演で地域コミュニティ再生の重要性を話したことを受けて、今回はその具体策を考えるためのワークショップを行います。地域コミュニティや地域活動のあり方を改めて深く見直すことが今日の目的です。

支え合いの活動は今後ますます必要となる一方で、担い手の高齢化や参加者の固定化が進み、地域の中で活動の輪が広がりにくいという課題があります。

また、活動団体同士の横のつながりが弱く、地域活動が縦割り化しているように感じられる点も問題です。

「連携が必要」と言われても、互いに何ができ、何ができていないのかが共有されておらず、具体的な連携の進め方が見えにくいことが障壁となっています。そのため、まずは“できていないこと”を率直に共有することで、連携のきっかけをつくることが重要と考えます。

（２）グループワーク①　　～グループ共有・分類作業～

- グループ内で自己紹介
- 持参した「事前情報シート」を参考に、個々で付箋（１テーマ×１枚）に転記
- 付箋を大分類「出来ていること」「出来ていないこと」に分け机の模造紙に貼る。
- さらに、小分類（「人材」「資源」「制度」「連携」等々）に仕分け

➡　仕分けした付箋の状況から感じたことをグループ内で意見交換

【模造紙レイアウト】

A.出来ていること	*B．出来ていないこと*

※机上にそれぞれの団体の役割を配布

（３）中間報告　～全体での共有～

➡いくつかのグループより、グループ内での意見や感想を全体発表

◆発表（グループ１）

・自治会や地区部会活動に無関心な方が増えてきているのが問題。

・連携・支え合いに関しては、できている地域とできていない地域の格差がある。

・支え合いの活動はあるものの、担い手が少なくなってきいて、活動が思うようにできない。活動拠点が遠くて参加できないことが多い。

・若い方がなかなか協力してもらえなくてリーダーが不足している。

◇関谷教授からのコメント

・自治会や地区部会への関心低下は多くの地域に共通する課題であり、加入率も下がっています。

・多忙であったり関心の多様化によって地域に目を向けにくくなっているが、高齢者福祉や防災の面からは地域のつながりが不可欠であり、対応は喫緊の課題です。

・担い手不足の背景には、関心の欠如だけでなく、参加のきっかけや方法が見えないことがあげられます。実際には、関心がないというより、必要な情報が十分届いていないために参加に至らないケースが多い。情報が共有されれば参加者は確実に増えると思います。

・地域住民が個々でもっている特技を引き出せていないところがある。例えば、リタイヤした世代は、現役時に培った知識や経験を沢山持っており、地域活動に活用できれば担い手も増えていくと思います。

◆発表（グループ５）

・地域によって連携状況に差があり、連携が進んでいる地域では組織的な協力体制や見守り活動が機能している。

・一方、連携が不十分な地域では、支え合い団体間の横のつながりが弱まり、合同連絡会の廃止によって他団体の状況が把握しづらくなったりしている。

・また、障害に関する理解や支援が十分でなく、サービスや施設の受け皿不足、情報不足も課題となっている。

◇関谷教授からのコメント

・地域では、老人会・自治会・子ども会などの担い手が減り、活動の縮小や子ども会の解散など、これまで地域を支えてきた団体が脆弱化しています。

・異世代交流の開催にも子どもの参加が少なく、世代、団体、分野ごとの縦割りが進み、横のつながりが作りにくくなっています。人や資金といった活動資源の先細りも進み、組織の維持が難しくなっていることが連携停滞の一因となっています。

・さらに、障害の理解や支援に関する情報共有が不十分で、8050 問題をはじめとした当事者の実情が地域に十分伝わっていない。精神疾患のある方への支援やピアサポートの場づくりも不足しており、「どの場面で、どんな人材や場所が求められているのか」といった情報が発信されず、具体的なアクションにつながりにくい状況が続いています。

（４）グループワーク②　　～課題の抽出・これからの取組みについて～

- グループワーク①の内容をもとに、これからの課題を抽出
- 課題解決のための「これからの取組」を探っていく
- ホワイトボードに意見や感想を記載

➡いくつかのグループより発表

◆発表（グループ２）

・若い世代の参加不足が課題となっており、地域活動への関心の低さや生活の忙しさ、地域への理解不足が背景にあると考えられる。

・役割分担が明確で組織体制が整った地域では運営が安定している。一方、そうでない地域では解散や停滞が生じるなど格差が大きい。

・さらに、制度の理解不足から民生委員や住民が困難を抱えるケースもあり、情報・知識の共有強化が求められている。

◇関谷教授からのコメント

・制度や資源は揃っていても当事者に届かないケースが多く、支援者と当事者をつなぐ仕組みが課題となっています。現役の学生に聞くと、関心はあるものの忙しく長時間の参加は難しいとの声がある。一方、短時間・部分的な参加ニーズに応える仕組みあれば参加しやすくなります。

・情報発信の工夫や、支援ニーズと参加希望者をマッチングするデジタルプラットフォームの活用が今後必要になってきます。両者をマッチングする取組み事例も全国で出てきています。

◆発表（グループ３）

・地域活動では、参加者が集まらない地域と、参加者が増えすぎて運営が追いつかない地域の双方の課題が見られる。

・周知方法は回覧だけでは不十分で、切り取り式チラシなどの工夫や、他団体と連携した複数の媒体活用が有効とされる。

・また、担い手不足や老老支援が進む中で、多世代に届く情報発信の工夫が求められている。

◇関谷教授からのコメント

・周知方法は普通の回覧だけでは見過ごされてしまいがち。事例にあった切り取り式チラシなどの工夫は非常に有効です。現在の１０代、２０代は生まれた時からスマートフォンが身近にある。ＳＮＳを用いた情報収集や発信が当たり前の行動様式となっているため、意識的に工夫した情報発信・共有の姿勢が必要です。

・行政のパブリックコメントのような「このような事業を実施します」という情報では、住民の関心は喚起されず、意見もほとんど出ない。「どのような課題が生じているのか」、「どのような人材、資金、支援が求められているのか」等の具体的な「働きかけとしての具体的な情報」を発信することで、住民が自身で必要性を感じ取って、自らの行動につながりやすくなります。

◆発表（グループ４）

・地域では自治会や関連団体との横の連携が不十分であるとの課題があり、千葉市が進める「地域運営委員会」の活用が提案された。地域の主要団体（地区町内自治会連協、社会地区部会、地区民児協、中学校区青少年育成委員会、地区スポーツ振興会）に加え、大学・病院・金融機関など多様な組織が参加できる仕組みで、情報共有を進めることで新たな取り組みが生まれる可能性がある。

・地域貢献意欲のある外部団体も積極的に巻き込み、地域課題を共同で考えていくことが期待される。

◇関谷教授からのコメント

・「地域運営委員会」は千葉市が導入を進めているが、未設置の地域も多い。一方、全国では小・中学校区を単位に地域団体を横につなぐ協議会づくりが進み、総務省も支援しています。

・地域団体でも縦割り構造の影響で先細りが進んでおり、横の連携が必要とされています。地域運営委員会は「新たな負担が増える」と思われがちだが、実際は従来の活動で難しくなった部分を共有し補完する、棚卸ししていく仕組みです。地域が保有している資源のなかで、「どの取組を、どの単位で行うことが、地域の持続可能性を高めるのか」という視点で考えることが重要です。

（５）本日のまとめ・講評・質疑応答

- 関谷教授より本日のまとめ・講評をもらう

◇関谷教授からのまとめ・講評

・本日も参加者により、「できていること」「できなくなっていること」の整理を実施しました。こうした現状の洗い出しを継続することで、今後求められる運営体制や、組織づくりの方向性を検討する議論につながっていきます。

・地域の連携組織づくりを進める上では、本日行ったような丁寧な現状整理が不可欠です。本日出された課題や意見については、後日改めて情報共有を行い、関係者間や周囲への共有につなげていって欲しいです。

・地域福祉の推進には、行政任せでなく、地域住民自身が「自分たちに何ができるか。何をなすべきか」を主体的に出し合うことが重要です。そのためには、多様な主体が参画し、それぞれの強みを持ち寄る場「協働のプラットフォームづくり」が求められます。

・民間企業は「地域に貢献したい」という意欲が非常に高く、子育て支援や環境保全など幅広い分野に関心をもっています。一方で、企業側から地域側への窓口が分かりにくく、自社のサービスや資源をどのように地域へ提供すればよいか見えにくくなっています。地域と企業をつなぐ橋渡し役となる“場”が不足しています。

・地域活動のメンバーが固定すると、外部からは「閉じた世界」に見え、参加しづらくなるという課題が多くの地域で見られる。外部の人が入りやすい“入り口”を意識的につくる必要があります。

・本日のようなグループワークや円卓会議は、そうした入り口づくりに有効です。各地域の規模や状況に応じて、グループワークや円卓会議を開催し、現状整理や課題・原因・必要な取組を話し合うことが、地域内のつながりを生み出す基盤になりますので、是非、実践してみて下さい。

※事務局より

本日はご参加いただき、誠にありがとうございました。今回のグループワークでの参加者の皆様のご意見や関谷教授からのご助言を踏まえ、あらためて今後の課題となる内容を整理し、下記のとおり取りまとめました。今後の推進協議会の運営や、次期地域福祉計画の対応に活かしてまいりたいと考えております。

〔人材・参加（担い手・意識）〕

- ✧ 地域活動の担い手・リーダー不足や高齢化の進行
- ✧ 若年層・現役世代の参加促進（参加しやすい仕組みづくり）
- ✧ 自治会・地域活動への関心低下への対応
- ✧ 活動メンバーの固定化や新規参入しにくい環境の改善

〔連携・ネットワーク〕

- ✧ 地域団体間の横の連携が不足（地域でも縦割り構造がある）
- ✧ 企業・大学・医療機関等との連携促進（外部資源の活用）
- ✧ 地域と企業をつなぐ窓口・プラットフォームの整備
- ✧ 地域運営委員会等による協働体制の構築・拡充

〔情報・仕組み（見える化・運営）〕

- ✧ 情報発信・共有の不足（参加機会・具体的な支援内容の見える化）
- ✧ 多様な媒体（SNS等）を活用した効果的な情報発信の強化
- ✧ 支援ニーズと担い手をつなぐマッチング機能の構築
- ✧ 制度・支援内容に関する理解不足の解消

≪追伸≫　後日、関谷教授よりメッセージをいただきましたのでご紹介します。

最後にアドバイスを加えるとすれば、「ピアネットワーク（相互評価の関係性）」づくりの重要性です。要するに、「お互いを褒め合う」地域づくりです。

地域における様々な活動は、その縦割りゆえに、互いを十分に知ることができていなかったり、評価し合うことが不十分だったりします。しかし、自分が関わっている活動が他の人たちに知られ、尊重され、評価されることは必要不可欠のことで、自分たちの活動が必要とされているということを実感できる契機となります。

地域活動の見直しは、この相互評価の一環として考えられるもので、各々を大事に思うからこそ持続させるために知恵を出し合うことが求められるわけです。今回のグループワークでも、そうしたことは実感できたのではないかと思います。ぜひ、見直し作業を積み重ねて、地域ぐるみで支え合いの密度を高めていってほしいと思います。